資料・統計

2001年病理部業務統計

Annual Report of Pathology in 2001

阿部康彦 渡辺芳明 桜井友子 宇佐見公一
木下律子 小林由美子 泉田佳緒里 佐藤由美
北澤綾 栗原アツ子 川崎幸子 村山守
余湖奈美子 太田玉紀 本間慶一 根本啓一

Yasuhiko ABE, Yosiaki WATANABE, Tomoko SAKURAI, Kouichi USAMI, Noriko KINOSHITA, Yumiko KOBAYASHI, Kaori IZUMIDA, Yumi SATOU, Aya KITAZAWA, Atuko KURIHARA, Satiko KAWASAKI, Mamoru MURAYAMA, Namiko YOGO, Tamaki OHTA, Keiichi HOMMA and Keiichi NEMOTO

要 旨：2001年（1月～12月）病理部業務統計をまとめた。総依頼件数は22,721件で，内訳は病理組織診断11,770件，細胞診断10,951件，電子顕微鏡検索41件，病理解剖30件，遠隔病理診断10件，細胞診，組織診を合わせた術中迅速診断861件，院外受託1,327件，肺癌検診喀痰細胞診1,871件であった。業務件数は作製ブロック数40,824個，各種染色標本82,708枚であった。受け入れた研修，実習生は総数20名であった。

2001年は前年に始めた乳腺センチネル・リンパ節の迅速が本格的に行われ，リンパ節の迅速が大幅に増加した。さらに乳癌のHER2タンパクの免疫組織化学的検索HercepTestを開始した。

はじめに

2001年病理部業務統計を報告する。業務は日常の組織診断，細胞診断の他に病理解剖，電子顕微鏡検索，肺癌検診，遠隔病理診断等の業務があり，また症例検討会，関連学会・研修会等での講演，発表，投稿等の研究的業務が多数あった。さらに研修医・実習生への指導等も加わり業務は多忙であった。

なお2001年には乳癌のHER2タンパクの免疫組織化学的方法Hercep Testによる半定量的検索を保険点数の認可とともに7月より開始した。

2001年病理部業務件数（表1）

総依頼件数は22,721件で，組織診11,770件，細胞診10,951件であり，ほぼ横ばいである。しかし院外受託は1,327件で，13施設から依頼があり，依頼施設は県立病院4施設（加茂病院，津川病院，坂町病院，新発田病院），その他9施設で年々増加して来ている。さらに細胞診でも肺癌検診では約200件の増加が見られ，1,871件であった。術中迅速診断も前年の691件から861件に増加したが，乳癌センチネル・リンパ節迅速の増加によるものと考えられる。また免疫染色も年々増加し9,000枚近くになり，さらに同年7月に開始したHercep Testも112件に達した。

2001年病理検査科別依頼件数（表2）

総依頼件数は20,880件で，組織診ではがん予防センターが11,770件中6,252件で半数以上を占め，消化器内視鏡が大半であった。院外受託は1,134件で約1割を占め，県立加茂病院，県立津川病院の2施設で7割強であった。

細胞診では産婦人科が9,080件中4,393件で半数近

新潟県立がんセンター新潟病院 病理部
Key words：病理統計，病理組織診断，細胞診，病理解剖，遠隔病理診断，センチネル・リンパ節，Hercep Test

表1　2001年病理部業務件数

		総件数	組織診	細胞診	電子顕微鏡	病理解剖	遠隔診断
依頼件数	がんセンター	13,271	5,062	8,209	37	30	10
	がん予防センター	6,252	5,574	678			
	院外受託[1]	1,327	1,134	193	4		
	術中迅速(再掲)	861	383	478			
	肺癌喀痰集検[2]	1,871		1,871			
	(依頼合計)	22,721	11,770	10,951	41	30	10
業務件数	ブロック数	40,824	39,797		328	1,027	
	切り出し数	60,130	59,101			1,029	
	普通染色	69,299	50,309	17,961		1,029	
	特殊染色	4,496	3,414	994		88	
	免疫染色[3]	8,706	8,364	202		140	
	ISH 染色[4]	95	95				
	Hercep Test[5]	112	112				
	(染色合計)	82,708	62,294	19,157		1,257	
実習生	研修医	4					
	医学部学生	3	新潟大学医学部				
	臨床検査学生	13	新潟医療技術専門学校　8，北里保健衛生専門学院　5				
職員	病理医	3.1	常勤　3.0，非常勤　0.1(隔週　1日)				
	細胞検査士	6					
	臨床検査技師	3					
	技師	1					

1) 院外13施設(県立病院4施設，その他病院，医院9施設)
2) 9市町村を担当した
3) モノクローナル抗体65種類，ポリクローナル抗体31種類で染色を行った
4) In Situ Hybridization (ISH) によるEBウイルスの検索を行った
5) 乳癌のHER2タンパクの免疫組織化学法での半定量的検索を行なった

くを占め，続いて泌尿器科，内科，予防センター外科，内視鏡（呼吸器）の順で依頼が多かった。

電顕依頼は血液疾患主体で小児科が41件中19件で約半数を占めた。また剖検は30件中内科が24件で大半を占めた。

2001年病理組織部位別件数（表3）

11,770件中，生検材料が8,405件で70%近くを占めた。生検材料では消化器系が圧倒的に多く，続いて骨髄生検が多かった。手術材料では皮膚科，消化器，婦人科，乳腺，骨・軟部，肺等の順であった。迅速材料は前年より増加したが，乳腺のセンチネル・リンパ節の増加が大きく，リンパ節の迅速は121件に達した。続いて骨・軟部，卵巣，膵・胆道，気管支・肺等の順に多かった。

2001年細胞診成績（表4）

件数は延べ依頼件数であり，10,066件であった。子宮頸体部が4,620件で半数近くを占め，続いて尿，気管支・肺，乳腺，喀痰，胸腹水が多かった。術中迅速細胞診では胸・腹水が572件中533件で圧倒的に多かった。なお術中迅速細胞診は検体処理，診断に時間がかかり，見かけの件数以上に人員，業務時間が必要であった。細胞診陽性(Class Ⅳ，Ⅴ)は1,224件で12.1%でほぼ前年なみであった。また目的とする細胞がほとんど見られないような標本で検体不良としたものが171件で1.6%近くあり，特に乳腺，甲状腺穿刺吸引細胞診に多かった。検体不良は再検査など患者の負担増につながるので，減少するよう努めるべきと思われるが，2001年は前年と比較し件数では50件強減少し，約2%から1.6%に減少した。

表2 2001年病理検査科別依頼件数

	総依頼件数	組織診件数(%)	細胞診件数(%)	電顕件数	病理解剖
内科	1,425	499(4.2)	901(9.9)	2	24
内科（がん予防）[1]	6		6(0.0)		
神経内科	1		1(0.0)		
精神科					
小児科	507	411(3.4)	92(1.0)	19	4
外科	1,548	1,114(9.4)	433(4.7)	2	1
外科（がん予防）	844	174(1.4)	670(7.3)		
整形外科	344	324(2.7)	19(0.2)	4	1
脳神経外科	55	39(0.3)	16(0.2)		
呼吸器外科	620	286(2.4)	334(3.6)	2	
心臓血管外科					
内視鏡	700	165(1.4)	535(5.8)		
内視鏡（がん予防）	5,402	5,400(45.8)	2(0.0)		
産婦人科	5,144	751(6.3)	4,393(48.3)	4	
耳鼻咽喉科	521	280(2.3)	353(3.8)	4	
口腔外科	4	4(0.0)			
眼科	14	14(0.1)			
皮膚科	675	675(5.7)			
泌尿器科	1,657	498(4.2)	1,159(12.7)		
放射線科	86	2(0.0)	84(0.9)		
麻酔科					
院外受託[2]	1,327	1,134(9.6)	193(2.1)	4	
総　　計	20,880	11,770(100.0)	9,080(100.0)	41	30

1)（がん予防）：がん予防総合センター

2) 主に消化管生検材料、骨髄の病理診断及び喀痰、尿の細胞診の受託であった

おわりに

2001年病理部業務統計を報告した。今年はセンチネル・リンパ節迅速の本格化，Hercep Test の開始と乳癌関連の業務の増加が目立ち多忙な年ではあったが，病理部としての業務を遂行できたと思われる。

業務遂行にあたり関係する皆様の御協力に感謝するとともに，今後のいっそうの御支援をお願いしたい。

表3　2001年病理組織部位別件数

	総件数[1]	生検材料	手術材料	迅速材料
頭～頸部	256	90	146	20
甲状腺	80	2	74	4
気管支・肺	400	153	226	21
乳腺	570	215	341	14
肝臓	64	15	41	8
心・縦隔	31	11	17	3
膵・胆道系	83		61	22
食道	382	347	30	5
胃	3,917	3,641	262	14
十二指腸	80	58	22	
小腸	29	18	10	1
大腸	2,439	2,243	193	3
腹膜・腸間膜	43		22	21
腎・副腎	66		52	14
膀胱	145	112	30	3
前立腺	262	206	56	
精巣	26	2	23	1
卵巣	104		72	32
子宮	635	333	297	5
骨・軟部組織	322		258	64
骨髄	903	903		
皮膚	703		696	7
脾臓	3		3	
リンパ節	227	56	50	121
（合　計）	11,770	8,405	2,982	383

1）生検材料，手術材料，迅速材料主臓器の総数を計上した

表4　2001年細胞診成績

	件数[1]	迅速[2]	Class I	Class II	Class III	Class III a	Class III b	Class IV	Class V	検体不良	判定保留
頭～頚部	47		3	32	2			3	3	2	
甲状腺	307		26	176	13			3	51	32	1
気管支・肺	773	24	27	399	43			18	280	4	
喀痰[3]	732		31	579	33			16	71	1	
乳腺	769	1	38	336	38			12	209	112	
肝・胆・膵	32			14	6			3	5	2	
子宮頚体部	4,620		1,544	2,693	68	226	11	12	41	9	
子宮断端部	187		106	66	2	7			6		
外陰部	11		1	5					3		
骨髄	30	1	17	11				1			
腫瘍	52	6	3	11	3			3	21	3	
リンパ節	66	1	6	9	4				41	5	
心嚢液	14	3		8	1				5		
脊髄液	143		4	86	13			4	36		
胸水	335	137	21	218	12			5	78		
腹水	607	396	44	421	15			12	113		
尿	1,310	1	108	924	112			40	125	1	
その他	31	2	9	11	5				4		
（合　計）	10,066	572	1,988	5,999	337	233	11	132	1,092	171	1

1）細胞診検査材料の延べ件数を計上した
2）術中迅速細胞診材料の延べ数を計上した
3）肺癌検診の件数は含まず